

つまり、朝廷は二度とこの地に都を造ろうとはしなかったし、後に戦国時代になっても、この地を城や都市として利用しようとした大名はいなかったということなのである。だからこそ、現代の奈良市街は平城京とはまったく離れたところにある。そして、それゆえに平城京は簡単に発掘復元することができたのである。

もうお分かりだろう。要するに**平城京という都は、縁起の悪い都だった**のである。

・・・

ところが、この地に天武系の天皇家が移った後、その子孫である聖武天皇が大仏まで造ったにもかかわらず、天武系は**男の子が生まれず、称徳女帝の代で断絶**してしまった。その結果、壬申の乱の敗者で、ずっと皇位から干されていた天智系に皇統が戻り、皇統を継いだ若き桓武天皇は平城京を捨てて長岡京、平安京に都を移したのである。

・・・

それはなぜか。答えは簡単だ。天皇家を守護する、もっと直截に言えば**天皇家に男の子が生まれ続け、永遠に栄えるという重要な課題を奈良仏教は、大仏は、そして平城京は果たすことができなかった**からなのである。

私が子供の頃には**仁徳天皇陵**と習った古墳も、今では天皇陵であることは間違いないものの、仁徳天皇の陵であることは非常に怪しいということから、**現在は大山古墳と呼ばれ**、教科書にもそう書かれている。

他力本願というのは、いわゆる親鸞聖人の教えから始まった、この宗派の生命線とも言うべき重大な一言菓なのだ。

他力とは「他の人間の力」という意味ではない。「絶対他力」と言い、本願寺の信仰の対象である**阿弥陀如来の廣大無辺な力を指す**のだ。人間は極めて弱い存在であり、自力で悟ることも救われることもない。だからこそ阿弥陀如来の絶対他力に頼ろうというのが、本願寺の教えの根幹である。それをこんな「悪い」意味で使われては、宗教集団としての本願寺（親鸞の教えは他の教団も伝えているから、真宗連合と言った方が正確かもしれないが）は立つ瀬がない。

そこで皆さんは疑問に思われたらう。なぜこの三大改革は「改革」と言い、田沼の政治は「改革」とは言わないのか。それは、実はこれが江戸時代の評価だからなのである。ここでほとんどの教科書に載っていない、この時代の歴史を理解するキーワードを申し上げよう。それは「**貴穀賤金**きこくせんきん」である。これは、米を尊んで金を賤しむと

ということで、もともとは朱子学の発想だ。日本はもともと朱子学の国ではなかった。だから織田信長、豊臣秀吉には貴穀賤金という考え方はなかった。

しかしながら、徳川家康はどちらかというところ商業嫌いの農業好きで、農業を奨励して日本を石高制（米本位制）にした後、朱子学も日本に取り入れたものだから、日本は江戸中期以降ガチガチの貴穀賤金国家になってしまったのである。そういう人たちが米の増産に努めた三大改革を「貴穀」の視点から正とし、逆に商業を盛んにしてそこから税収を得ようとした田沼の政治を「賤金」の視点から悪と見たわけだ。つまり、この三大改革は「正」、田沼政治は「悪」という評価は。実は江戸時代の評価なのである。今の経済学とはまったく違う常識のあった江戸時代の、もっと具体的に言えば朱子学が常識であった時代の色眼鏡でそのまま歴史を見ているのだ。

華僑の、一人に貧しい少年がいたとしよう。ところがその少年はものすごい秀才で、上級の学校に行っても十分通用する、そういうようなときに、実は華僑社会では親戚中から金が集まるのである。いとこのいとこぐらい、顔も見たこともない人からもお金が来る。そうしたお金でめでたく少年は大学や大学院に行けるというわけだ。

ここまでなら確かに美談である。ところがこの話にはパート2があるのだ。

その優秀な少年が青年となり、例えば大学を卒業し、あるいは軍の士官学校などを出てどこかの官僚や軍人になったとしよう。そうすると今度は、そのとき金を出した遠い親戚たちがみんなその人間にタカリに来るのである。

うちの息子を部下に採用しろとか、うちの会社にこの辺の商権を与えよとか、そういうことを数限りなく言ってくる。そしてもうお分かりだろうが、それは決してむげに断れない。断ろうとすれば、大学に進むときあれほど金を出してもらっておきながら、ということで必ず反発を食らい、そういう人間は「人間のクズ」として社会から排除されてしまうからなのだ。

つまり、**儒教が色濃く残っているこうした社会では、必ずファミリーが国や企業や軍隊を牛耳るという構図ができてしまうのである。**

・・・

中国は、もうこれは誰もが知っている太子党という共産党幹部たちの子弟が、権力者の息子であるということで国や企業を牛耳っているのである。

・・・

中国、韓国、台湾といった国々は、なまじこの**儒教のしがらみ**があるがゆえに、なかなかファミリーを超越した公平な人事、公平な人材登用ということができない。

当たり前の話だが、どんな制度にもどんな習慣にもいい面と悪い面がある。**儒教制度のよい面は、お年寄りの面倒を最後まで見る**ということだろう。それは彼らの美点でもある。しかしその反面、それはまったく優秀ではない一族の人間を、本来公平に選ぶべき役職や企業の重役に登用してしまうという汚点にもなっているのだ。

日本はこういう儒教から脱却したからこそ、近代化することができた。

それは、その親会社である中日新聞社が発行した『中日ドラゴンズ史』という書物を紐解けば明確に分かる。そこには、当時の親会社の社長の生まれ年の干支が辰年であったから「ドラゴンズ」と命名したと書かれている。これはその当時の事情を知る関係者が同時代に書いたものだから、歴史学の立場から言えば一級史料になる。こういう一級史料をもとに歴史を組み立てていくというのが現在の日本歴史学のやり方だ。

問題は、そこに落とし穴があることに気がついていないということだ。落とし穴というのは、こういうことだ。

歴史学者はこういう言い方をしたがるのである。

「二十世紀の日本の球団の中で少なくとも中日ドラゴンズという球団は、親会社の社長の生まれ年の干支が辰であることによってドラゴンズと名づけた。ならば、同時期に阪神タイガースという球団があったが、このタイガースという球団名もおそらく、当時の球団代表者の干支が寅年であることによってつけられたものであろう」
実はこれは間違いである。

・・・

人間というものは、特殊なこと、意外なことについては記録するが、一般的なこと、誰もが知っている常識的なことを無視する傾向があるのだ。

私が指摘する日本の歴史学の三大欠陥の一つである**実証主義の偏重**という史料絶対主義というのは、史料というのはまさに中日ドラゴンズの命名の理由のように、特殊なケースが残される場合が多いということは無視していることである。これは逆に言えば、**一般的な常識は記録されない**ということは無視しているということでもある。

なぜか？ それは日本人が民主主義と呼んでいるものが西欧型ではなく、「和」という日本型、言葉を換えて言えば**反対者が一人もいない**ということ**を理想とする民主主義**だからである。これが恐るべきものであることは、もうお分かりだろう。だから、何十年もあとにスタートした韓国に抜かれるという、世界中どこの国でもあり得ないことが日本でだけは起こるのだ。

菅原道真をいかに死後太政大臣にしたからといって、それは一種のフィクションである。実際の宮廷にはそれとは別に大臣がいるのだから、まさに絵空事としか言いようがない。しかし、そうすることが**霊の慰めになる**、と彼らが考えていることが重要なのだ。なぜなら、**霊が慰められれば「怨霊」は「御霊みたま」といういい神になる**というのが怨霊信仰の基本だからだ。だからこそ、怨霊鎮魂というのは必ずなされなければならないのである。

そもそも決断力というのは一体何。これは意外に気づかれていないことだが「**異論を切り捨てる力**」ということである。そもそも全員が最初からあるものごとに賛成なら決断は必要ない。そうなるに決まっているからだ。したがって決断に要する力、決断力も必要ないのである。では、決断力を要する場合というのは、どういう場合かという、それに対して強い抵抗がある場合である。その強い抵抗を押し切るためには決断力というものを必要とする。

最近、最後の将軍・徳川慶喜の生きざまに改めて注目している。

はっきり言って、とんでもない男だ。二〇一三年の大河ドラマ『八重の桜』でも活写されていたように、わがままで自分のことしか考えず、多くの人間、特に幕府に忠実な人間を犠牲にした。彰義隊あるいは会津藩の人々、新撰組隊士もその例に漏れない。彼らはいかに無念だっただろう。**忠節の対象である慶喜は明らかに彼らを使い捨てにした。**

しかし、ここが歴史というものの興味深いところなのだが、日本という国、あるいは日本人という視点から見れば、慶喜は大きな貢献をしている。

彼が戦わずに逃げまくったことによって、江戸城無血開城は成功した。百万都市であった江戸は焦土にならずに済んだ。いや、慶喜が官軍に対して徹底交戦を命じていれば、日本全土が焦土になったかもしれないのだ。それを考えれば、彰義隊や会津藩士には気の毒だが、慶喜の態度は歴史的に見て「正しかった」ということになる。

レストラン事情に詳しい人は、東京の日比谷公園の中にある百年を超える老舗、「松本楼」の創始者として名を記憶されているかもしれない。しかし、実はこの梅屋庄吉という男、世界史を変えたと言えるぐらいすごい人物なのだ。

一九一一年、中国で辛亥革命が起こった。秦の始皇帝以来二千年にわたって続いていた皇帝制が倒れ、国父・孫文による第一革命が成功して共和制への第一歩を踏み出したのである。実は、この孫文という人は非常に親分肌でリーダーシップのある人だったが、唯一と言ってもいいほど欠けていたのが資金調達能力だった。

革命には膨大な資金が必要なのは言うまでもない。

・・・

実は梅屋庄吉の本業はレストラン業などではない。彼は映画ビジネスの天才だった。日本では日活の創始にも関わっているのだが、実は主に東南アジアを中心に映画制作、興行で大儲けをし、大富豪となったのだ。

その金のほとんどを梅屋は孫文に渡して、革命の資金として使わせた。その額は今日の額にして、ある学者は二兆円と言ひ、ある人は一兆円と言う。少なくとも一兆円以上の金が梅屋から孫文に渡され、その資金が結果的に辛亥革命を成功させたことは紛れもない歴史的事実なのだ。

・・・

梅屋のことが今まで知られなかったのは、彼が一切の見返りを求めず、子孫にも「恩着せがましく中国にこれを言うな」と遺言したからだ。しかし、没後ほぼ八十年を経て、ようやくそのことが語られるようになった。

そこで私が思い出すのは、かつてよく語られたジョークである。ご存じない読者も多いかもしれないので、改めて紹介しよう。「理想の軍隊の構成はどのような民族でやるべきか」というものである。「大将はアメリカ人、中堅将校はイギリス人、そして下級の兵士は日本人」——これが最高で、その逆は最悪だというのだ。

考えてみればずいぶん情けない話だが、とにかく下級の兵士というのは、お分かりかと思う。日本人というのは上の言うことに逆らわず、黙々と規律正しく物事を成し遂げ、非常に忍耐強く、任務を放棄したりしない。

ところが、第二次世界大戦のときが典型的であるが、その参謀とか上級指揮官といった人間たちは、むしろこういう兵士の上にあぐらをかいて、大局的に大きな失敗を繰り返した。第二次世界大戦において特に陸軍の兵士は、敵と戦って戦死した人数に匹敵するほど、いやそれ以上の餓死者、戦病死者が出ている。南方戦線のガダルカナルなどでは特にそうだ。これは作戦ミス以外の何ものでもありません。

つまり、我々日本人は上層部というのが情けない形になることが多いということ、実は昔から他の民族にも知られているのだ。今に始まったことではないのである。

その理由についてはいろいろあるのだが、ここで一つ指摘しておきたいのは、日本人は政治を「穢れ仕事」だと考えているという悪弊である。

記者クラブというのは、一部の巨大マスコミ（新聞、通信社、テレビ）などが親睦団体（と称してはいるが実際には談合で報道を操作する圧力団体）を形成し、官庁や公党と独占的に接触することにより、情報をコントロールする仕組みのことだ。記者同士の親睦団体としての意味の記者クラブならば、世界各国、自由主義国家の中にも結構あるが、これはそうではなくて、**報道各社が一種のカルテルを結んで、官邸、官庁、公党と独占的に情報をやり取りするシステムのこと**なのである。

もちろん、これは報道の自由や国民の知る権利から見たらとんでもないことだ。なぜなら、私も四半世紀前はTBSという報道機関の大マスコミの記者として複数の官庁の記者クラブに所属していたので、ここで懺悔を込めて述べるが、記者クラブという存在があると、**権力者側は非常に情報をコントロールしやすい**。まあ、バーター取引というのが一番単純な形だが、特定の記者に対して、あるいは特定のマスコミに向かって「この情報を出すな」と持ちかけ、そしてその見返りに別の情報を与えるというものだ。

これも日本の歴史教育の大きな欠陥なのだが、ほとんどの人が「十七条憲法」の第一条は「和を以て貴しと為し、さからうこと無きを宗とせよ」で終わりだと思っているが、実はその続きがあるのだ。それは、「話し合いで物事を決めれば必ず成功する」という文言である。

日本の民主主義というのは、私は西洋的民主主義とは違う「談合的民主主義」と言った方がいいと思うのだが、その根拠がある。そういうことに目を配らずして、実は日本の政治は語れないのである。なぜならば、政治というのも一つの民族文化であり、民族文化の分析としての歴史という正しい視点がなければ、何をやってもうまく理解できないはずだからだ。

「従軍慰安婦を強制連行した」という吉田清治という男の証言がまったくのでたらめであったことを、朝日新聞がようやく認めた。二〇一四年八月五日付けの朝刊及びデジタル版に「吉田氏が濟州島で慰安婦を強制連行したとする証言は虚偽だと判断し、**記事を取り消します**」という訂正文が掲載されたのである。

しかし、実に卑怯で姑息で恥知らずなやり方であった。

この朝刊は従軍慰安婦特集を組んでいる。八月五日の一面にもその旨が明記してある。ならば、これほど重大な訂正はその一面で行なうべきだろう。しかし、そこにそんなことはまったく書かれていない。そして特集を目を皿のようにして読むと、ようやく後半のほうにこの文章がチラリと出てくる。

この虚偽報道で日本は、そして日本人はいかに名誉を傷つけられたか、国益が損なわれたか、子供達の中には世界でイジメにあった者もいよう。そういうことに対して謝罪の弁も反省の弁も一切ない。悪いことをしたら反省し謝るのが人間としての基本のはずだが、そういう姿勢はかけらもない。それどころか「一部の新聞や雑誌が朝日新聞批判を繰り返している」と、まるでこの件で朝日を批判している人間が悪人のような書きぶりである。

吉田証言がデタラメだったということは、それを真実として報道した朝日の記者は一体何をしていたのか？ 要するに、騙されたということなのだが、ならばその理由を徹底的に追求するのが報道機関として当然の義務である。しかし、それについても「当時、虚偽の証言を見抜けませんでした」と書いてあるだけ。卑怯姑息、恥知らずと呼ぶ所以である。

それにしても、こんな新聞を日本の良心と信じて愛読していた人間ほど気の毒な人達はいない。もう購読は止めるべきだろう。それでもやめないというならば、「気の毒」という言葉は撤回して「愚か」と呼ぶしかない。胸に手を当てて考えてみればわかるはずだが、朝日がこういうやり方で読者を騙したのは一度や二度ではないからだ。

「ソビエトは理想国家」「北朝鮮は労働者の天国」「文化大革命は人類の偉業」と讃える一方で、四半世紀前までは「韓国は軍事独裁国家」と徹底的に叩いていたのに、今度は韓国の言い分はすべて正しいと言わんばかりだ。

言霊というのは、手前味噌になるが、私が掘り起こした概念と言ってもいい。もちろん、国文学の分野では『万葉集』に出てくる言葉として言霊は知られていた。あるいは、神職になるために大学で神道学科に進んだ人にとっては必須の知識である。

しかしながら、それを現代の政治や行動、あるいは歴史と結びつけて語った論者は、

おそらく私が初めてだろうと自負している。

「言霊」とは、簡単に言えば、言えれば起こると考えること。つまり、言葉に物事を動かす力があると考えた発想である。本書でも度々その事例を述べている。

もちろん、それだけ取れば誰もが迷信だと言うだろう。だが、多くの日本人はこれを深層心理に持っている。そうでなければ、例えば「大地震が起こるなんて縁起でもないことを言うな」という発想にならないはずである。

しかし、ここで注意してもらいたいのは、アメリカもそのイギリスの植民地の一つだったということである。アメリカ人がイギリスから独立しようと決意したのは、アヘン戦争のように本国イギリスから紅茶を不当な値段で売りつけられようとしたからだ。このとき怒ったアメリカの居留民が、イギリスから来た茶箱を船の上からボストン湾に投げ込んだことから、アメリカ独立戦争は始まった。これがアメリカ人なら誰一人知らぬ者はない、ボストン茶会事件である。

そうした経緯があつて独立した国であるから、アメリカは日本に対してイギリス流のやり方で貿易を強制するつもりはまったくなかったのだ。むしろ国土開発のためにアジアからの移民を求めており、そのため一刻も早く太平洋ルートで中国への道筋をつけたかった。

実は商売というのは、当時の武士たちの基本哲学である朱子学では「悪いこと」なのである。だからこそ身分秩序も「士農工商」と商人が一番下に置かれている。つまり、「商人は一切ものづくりをしないのに、人が汗水たらして作った物を右から左に転売してそのかすりを取る悪いやつらだ」という感覚である。そして、ここが肝心なところだが、幕府が通商を行なえば、それは誇り高き武士が卑しい商人の真似事をするということになってしまうのである。

だからこそ、彼らは開国に反対した。武士とは言っても数代遡れば町人だった勝海舟や、武士であると同時に商人でもある郷士の出身である坂本龍馬は、商売が悪いことなどは夢にも考えていなかったに違いない。それどころか、通商国家にして大いに金を稼ぎ、それで海軍を創設せねば日本は滅びると思っていただろう。それは結果的に正しい道であったが、そういうことを悪と考える人が少なからずいたということも、この時代を見るのに重要な視点である。

とにかく、私が絶望すると言ったのは、右であろうが左であろうが、自分の国を守るということを真剣に具体的に考えず、一方では平和憲法、あるいは非武装中立論という幻想に逃げ込み、もう一方では、古くは自衛隊は軍隊ではない、そして最近では非核三原則は守られているという詭弁、そうしたウソとゴマカシの中に日本の防衛論を「抑留」し、それ以上一步も踏み出していないということである。

もうこんな連中に我々の国の防衛は任せておけない。きちんと論議しようではないか。

その際、もはや憲法九条などという幻想はかつての非武装中立論のように『知恵蔵』、

いや「ゴミ箱」に捨てる。それが議論を始める具体的な第一歩であると私は信ずるものである。

ミュンヘン会談でチェンバレンは、例えば国内の野党党首であったウインストン・チャーチルの「**狼に餌を与えては危険だ**」という反論を、「いや、飢えた狼だからこそ餌をやればおとなしくなるのだ」と押し切り、ヒトラーの要求を呑んだ。

その結果はどうなったか、皆さんご存じの通りである。

ヒトラーはこれで、弱腰のイギリスや他のヨーロッパに「**我々を止める力はない**」と判断し、大々的にヨーロッパ全土を支配しようと大侵略を開始した。

・・・

膨大な軍事大国、しかもいちばん恐るべきことはそれを批判する勢力も野党もなく、国民は国家がやっていることが正しい、逆に言えば周辺国家がやっていることはすべて間違っていると無邪気に信じ込んでいる、そういう国家がオリンピック（中国は二〇〇八年、北京五輪を開催している）で自信をつけたらどうなるか。歴史の教訓というのは、こういうことである。

さらに憂うべきは、彼らが対馬に対しても、「日本人が竹島を自分の領土と言い張るなら、対馬も我々の領土としてもらう」というようなことを言っていることだ。いや単に言っているだけではない、地方議会などではそういう決議をしているところもあるのである。こういう情勢で、もしも**在日韓国人に地方参政権を与えたら**いったいどうなるか。例えば、住民票を一斉に老岐に移し、**地方議会を乗っ取る**こともできるのである。そうすれば、住民全体の意思として、韓国への「復帰」を狙うなどということもできないわけではないのだ。こうした懸念は、韓国だけでなく北朝鮮についても言える。